

瓦版

発行所 柳川郷土研究会
柳川市大和町栄1078-3
発行人 武末十治男
編集責任者 金子俊彦



火 恩を知る

み 牡丹を植え終わってから、植木職人は、花が散ったら、お礼肥をやるように。といいお礼埋て帰っていった。

「恩返し」などという言葉は久しく耳にしなかった私の耳に「お礼ごえ」という老職人の一言がいつまでも心に残った。

若い二人が結ばれた。数年間に亘る思いがかなったのである。両家に出向いて、にがい思いをしたことも今は一つの思い出となって、私も安堵の胸をなでおろした。

式の打合せにやって来た。披露宴から新家庭に落ち着くまでの相談があつて、費用のことに話が及んだ。「随分かかるものですね」二人が嘆息した。「親御さんが全部もってくださいというんだ安心しなさい」と二人を励まし、「親はいつまでも子供が可愛いんだよ。有難いことだね」しみじみと二人にいい聞かせた。そのあと、彼のいった言葉に、私は胸をつまらせた。

「親はもう六十になります。いままでの三十年ちかくの恩はとも返しきれません。生まれる子供に返すのでしょうか。」

「親に逆らつて」とこぼした親御さんが、この言葉を聞いたら、何と思うだろうか。きっとこの二人は立派な家庭を築きあげるだろう。私は心から二人を祝福した。これらの二人はこの世にえがたし。一にはさきに恩をほどこす人、一は恩を知り恩に感ずる人なり。

一般的な考え方（武末十治男）
家族・他人に限らず「恩を受たら」思いやりの心をもってそれ以上の「恩を返えせる」人間になりたいものです。